

かさおか

発行所
天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66-1311



山葡萄 竹本 久子 作 (ちぎり絵)

をやの思いをにをいかけ、

^{うちうち}
内治に心を配り おたすけに誠の心を尽くそう

1. 一歩前進 百万軒
2. おつとめの徹底とひのきしん
3. 機を逃さず おさづけの取次

秋季大祭講話 要約

心を定めて勇んで掛かろう

世話人 島村廣義先生

ひながたは、心定めから始まった

秋の大祭は、立教の元一日を祈念してつとめられるお祭りです。

この元一日の様子は、教祖伝・教典に詳しく書いてありますが、教祖をやしむに真い受けたいという親神様のお告げに対して、当時の中山家の方々と親神様との問答が、三日間にわたって繰り広げられ、結果として、夫・善兵衛様が、一身一家の都合を捨て、親神様の仰せに従う旨を答えられた、この心定めがお道の始まりです。

夫・善兵衛様のこの心定めこそ、信仰者としての私たちの、何よりも心定めひながた・手本だと思えます。

それぞれがお道に引き寄せられた元一日、たすけられた喜びとお礼の気持ちから御恩報じを思い立ち、心定めてこの信仰を続けているお互いですが、その心定めは、夫・善兵衛様のこの心定めを手本として今日まで初代から延々と続けて守ってきた心定め

であるはずですが。

立教の元一日を思索し、そこから、それぞれがお道に引き寄せられた元一日を思索して、先を見据えて御恩報じの道を歩む、その心定めを程を改めてお誓い申し上げて、思召に答えられるように通ること、これが大祭をつとめる一つの意義だと思います。

つとめは、たすけの元立て

さづけは、たすけ「一条のこうのうの理

教祖は、子ども可愛い親心から親神様の教えを私たちに伝えられたばかりではなく、私たちが安心して通れるようにと、五十年にわたって、陽気ぐらひへのたすけ「一条の道を御自ら身に示して通られ、ひながたの道を遺されました。

私たちが陽気ぐらひへの道を辿ろうとするとき、常に教祖の親心溢れるひながたの道があるわけで、私たちにあって、何とありがたく、また頼もしい限りかと思案します。

教祖は、陽気ぐらひへのたすけ「一条の道として、おつとめを教えられ、おさづけの理を渡されました。おつとめは、よろづびたすけの御守護を頂く手立て、たすけの根本の手立てだと教えられます。

おつとめは、私たちの親神様へのつとめであり、親神様は元の神様・実の神様です。その元を立てるのが「元立て」で、元を立てるからお互いの身が立つのです。おつとめがたすけの元立てだという意味は、ここにあるわけです。

命の源であり、勇む力の源である親神様のお心に溶け込むのです。おつとめをしようと、本当に何時しか気が晴れて、心が澄んでまいります。親神様のをやという理を戴くから、心が澄んでくるのです。このたすけの元立てであるつとめの完成と、それに向かう人々の心の成人を、教祖は、現身をもって急ぎ込まれました。

おさづけの理については、人にたすかってもうりたいとの誠の心に授けられるたすけ「一条のこうのうの理と仰います。

おつとめは、よろづびたすけであり、おさづけの理は身上たすけのために渡されます。

教典の第二章「

さづけの理は、たすけ「一条を誓う一日の日の真心に授けられる、生涯末代の宝であつて、この理をうけて、親神のよぶぼくの馳せ巡るところ、広い世界に不思議なたすけは相ついで現れる。

と述べられています。

おさづけの理は、一名一人の心の真実を見定めて、たすけ一条のために渡されるのですから、戴くだけで終わって、たすけ一条のために使わなかったなら、親神様の深い親心には応えられません。

おさづけの理には、子ども可愛いわれぬえ二十五年の定命を縮めて世界たすけを急ぎ込まれた教祖の親心がこめられていることを、お互いはしっかりと自覚し、それに応えなければなりません。

おさづけの理は、人様に取り次いで初めて、その結構さが分かり、またその喜びも味わえます。

真柱様は、「おさづけの理は、教え通りにおつとめをつとめられなかった苦難の時代にも、道の飛躍的な発展をもたらした心強い手掛かりでした」と話されていますが、政府からの迫害・干渉の中でも、先人たちは、このおさづけによって、教勢伸展の御守護をいただきました。

ともすれば、科学万能とするこの社会情勢の中で、私たちは、おさづけの取り次ぎが疎かになってはいないでしょうか。お互いに、もっとおさづけの理の大切さを自覚し、その取り次ぎに真実を尽くさねばならないことを自覚しなければなりません。

誠真実は已むに已まれぬ心と行ない

また、おさづけを取り次ぐよぶほぐが、真剣に心を揃えて教会のおつとめをする、これがこそ、本当のつとめの在り方だと話されます。

真柱様は、『論達第二』で、「にをいかけ、おたすけが、年祭を迎える私たちの最も大切な信仰実践だと論じます。

教会長・布教師だけでなく、人だすけのための宝を頂戴している全よぶほぐが、その使命を自覚しておたすけの心を持ってもらいたい、人だすけの実行を心掛けてもらいたいと仰います。

おたすけといえは思い浮かぶ逸話で、榎井伊三郎先生のお話があります。

教祖の元へ、母親の身上たすけを願ひ出た伊三郎先生が、「お母さんの身上はたすからんで」との教祖の仰せに、諦めて家へ帰られるが、苦しむ母親の姿を見て二度ならず三度、教祖の元へ願ひ出られた。その真実に対して、子どもとして、「救からんものを、なんでもと言って、子供が、親のために運ぶ心、これ真実やがな。真実なら神が受け取る。」と仰せられ、たすけられたというお話です。お母さんは、たすからん命をたすけられ、八十八才までの長命を過ごされたと記されています。

人をたすける心は真の誠と教えられますが、病気で苦しんでいる母親の姿に、どうでもたすけてもらいたい、ならん中を何とかたすけてもらいたいと再三願ひ出られた伊三郎先生の真実、見ておれない、放っておけない、この何でもどうでもたすかってもらいたいという心と行ないこそが、親神様にお受け取りいたたく誠真実です。

この何でもどうでもどう、已むに已まれぬ心になかったら、おたすけはできません。

献血のご案内

期日： 12月21日（日）祭典終了後

場所： 大教会談話室にて受付

※師走の時季を迎え、輸血用血液が非常に不足致します。

身上かしのもの・かりものとお教え頂いております親神様のおはたらきに感謝して、勇んで献血ひのきしんにつとめよう！

私たちの初代がたすけられたときのことを考え合わせると、命をたすけられた喜びから御恩返しをしようと思ひ立ち、已むに已まれぬ御恩報じの氣持から、どうでもたすけたい、たすかってもらいたいという人だすけへの心の変化があったと思います。これが、おたすけの上には必要不可欠だと思いますが、今日の、私たちよぶべく、一番求められることではないかと思索します。

たすけられた勇み心をもってにをいがけ
理作り・伏せ込みを裏付けとしておたすけ

今、おたすけにをいがけの実動を、仕切って、促されますが、にをいがけは、ただの行事ではありません。元を教えてたすける道への案内だと教えられます。

そこから、おたすけへと進んでいきますが、それだけに、相手さんに信用してもらえないままの、こちら側の誠実さ、また重ねて足を運ぶ根気、そのためには、日々、教えに沿った生き方を、自らどんなに心掛けて通っているかということが、一番問題になります。

このお道のおたすけは、心だすけです。心をたすけるためには、先ず自らが相手の心の内を、しっかりと聞くことから始めると思いますが、さらには相手の方の苦しみ・悩み・心の痛みを、共感できるところまでこちらが受け止めることが、何よりも肝心だと

思います。

教祖のおたすけの根本・基本は、本当に子ども可愛い親心からです。この点については、逸話篇にいろいろと示されるといえます。

人間忠案に流されず、固い信念をもち、理の筋道を立てて、しっかりと自らが、真剣に通ることが、おたすけでは、一番大切だと思います。

御逸話の中に、「人を救けるのやで。」と仰せられた教祖に「どうしたら、人さんが救かりますか。」と尋ねられたのに答えて、教祖は、「あなたの救かったことを、人さんに真剣に話さして頂くのやで。」と仰ったとあります。

これしか、にをいがけに行つての話はありません。自分が直接たすけられた実感がないのなら、先祖がお道に引き寄せられたときのことを考え、信仰を始めた経緯、そこから御恩報じで通るようになったこと、また、たすけられた喜びに御恩報じのためにをいがけに歩いていくことを話したらどうでしょうか。

たすけられたことが台ですから、話しの取っ付きは、かじもの・かりもののお話して、これが教えの台とお聞かせいただけます。にをいがけに行つて、聞いてくださるころは、自分のたすかった話しをし、それから、かじもの・かりもの御教理に移っていきます。

改めて、自らの入信の元一日を思索することに立ち返らなければ、勇みの心は湧いてこないと思ひます。

12月 みんなそろって
ひのきしん
22日 (月) 年末大掃除
27日 (土) 詰所餅搗き

神様に御守護いただくのに、おつとめをととめることも大切ですが、おたすけの御用の上で、もう一つ大事なことは、裏付けとなる理作り、路々が、しっかり伏せ込むことが、不可欠だと思います。

何々に打ち出されるおがばの声を頼りに、おたすけに際して、自らもしっかり心を定め、それぞれが、人様の難儀・不自由にしっかりと誠真実を尽くすことだと思えます。

おがばでは、百二十年祭に向かう伏せ込みの場として、おやしきの西境内地拡張整備士持ちひのきしん、また、おやさごやかた南右第一棟ふしんを打ち出されました。それらだけではなく、おがばは、私たちが常から真実誠を伏せ込む親許です。たすけの根元である、このがばに、それぞれが真実誠をつくし、はこび、親神様に誠真実を受け取ってもらうことが、何よりもの御守護の根本です。

つとめ理・はこび理にたつて、いんむむの理も切ってもらい、また結構な御守護を頂戴できることは、別席でもお話ししたくじつじつです。

神様の鮮やかなお働きを願う前に、自らが、おがばに、またおがばの出張り場所である教会に、しっかり足を運んで、真心を伏せ込むことが肝心です。

さあ、実動の旬

教祖百二十年祭は、混迷する世の中に対して、陽

気づら、いへ方向転換の第一歩ともなる、たすけの旬・成人の旬だと仰せられます。

真柱様は、

この道を歩むお互いが心の向きを揃え、拳つてたすけ一条に邁進して、「今からたすけするのやで」と、やしろの扉を開いて、世界ふくがに踏み均しに出られた教祖の大なるお心にお応えしたい。

と仰います。

私たちが、この世おさめの真実の道に目覚めて、たすけ一条の真のよぶばへとして、をやの思いに近づく歩みを、しっかりと実動すること、これこそが、今日の私たちのつとめだと思えます。

一人ひとりが、先ずは動くこと、一人が一人に呼びかけて、しっかりとこの元なるをやを知らしめ、元を知らせることから、たすけが始まると仰せられますが、身近なところから、先ず行動を起こし、一つひとつお喜びいただける実績を積み上げて、三年後の教祖百二十年祭には、互いに導き、たすけた方をおがばにお連れ帰りして、教祖に、よう帰ってきたなあとお喜びいただけるような、三年千日活動にしたいと思えます。

勇んで掛かれは神が勇む。神が勇めば、何処迄も世界勇みます。

と仰せられます。

残された二年二ヶ月、さつてもさつても心定めて、をやにお喜びいただける道を、しっかりと通ることをお誓いして、今日のお話しは終わります。

直属ひのきしん五日隊

第2次隊

立教167年(平成16年)1月27日(火)~31日(土)

親里に真実の汗伏せ込もう!

委員会では、なかなか内容が進まず、また、現在の委員はお道専務の者が少なく、毎回参加出来る人数は、四、五名で、仕事の合間をぬっての準備となりました。

大会への理づくりの意味も込めて、毎月、機関誌つぼみを発行させていただいておりま
す。毎回、同じ委員で作成しているうちに、
ある頃から「させていたたく」という思いよ
り、「しなければいけない」という気持ちに
変わりつつある事に、皆が気づき始めていま
した。「このままでは駄目だ」と思いながら
も行動に移す事が出来なかつたある日、作成
したつぼみを支部長様に見て頂くため、お持
ちしたところ、『もっと自分達の言葉で表現
するコーナーがあってもいいのでは?』と、
一言の助言を下さいました。その瞬間、「変
えるなら、今しかない。もう一度作り直そう」
と思い、今まで考えていなかった読んで下さっ
ている会員さんの顔を思い浮かべて、私達委
員の思いを言葉にする、つぼみ作りを始めた
のです。ちょうど大会まであと四ヵ月と迫っ
た日の事でした。

そしていよいよ近づく大会に一人でも多く
の会員さんとおちばへ帰らせていただくため、
直接お誘いの電話をさせていただくこととな
りました。仕事を抱えての声掛けは予想以上
に進まず、お誘いした会員さんも当然、仕事
や勉強で忙しくされている方はかりで、「声

掛けは、肥になる」と、以前に聞いた事があ
りました。が、「本当に芽が出るのだろうか、
大会まで間に合わない」と、落ち込む日が続
きました。

ところが、間近になった十月中旬頃から徐々
に増え始め、最終的に百二十名を超えるご守
護を見せていただきました。十一月二日出発
の為に、大教会に集合した会員さんの多さに、
改めて多方面にお声掛けして下さった大教会
長様や、支部長様、各委員部長様の親心をひ
しひと感じ、喜びでいっぱいになりました。

その日の夜は、支部長様のあたたかい親心
で、ひまわり会の方も手伝いして下さい、
ホテルのバイキングのような沢山の料理を準
備していただき、賑やかに楽しんで行事を開
催させていただきました。

そして大会当日、中庭での式典の後、神殿
にて、揃っておつとめをつとめさせていた
きました。皆の心がひとつになった瞬間の感
動は、言葉では言い表す事が出来ないほどの
ものでした。

団参中も無事にお連れ通りいただき、貴重
な経験となりました。ご協力をいただいた皆
様に、感謝の気持ちでいっぱいです。また二
年後の女子青年大会に向けて、新たな気持ち
で、しっかりと歩ませていただくことを強く
決心しました。

(女子青年委員長 笹尾 理栄)

・原・稿・募・集・

内 容

①小随筆、②教会・布教所の独自の活動の紹介、③俳句・和歌
・川柳、④教会行事開催後の報告記事 等々

字 数

1000字前後 (800字~1200字)

題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。俳句等は1句からで
も結構です。

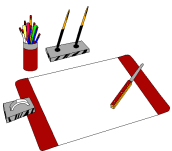
寄 稿 先

下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。

郵 便 : 〒714-0066 岡山県笠岡市用之江377

F A X : 0865-66-1314

尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。



修養科生の声



私の修養科

七四九期 森 本 正 典

木立の枯葉と共に、冬の色も日毎に濃くなつて参りました。今日この頃、笠岡大教会へ連なる方々へは、いかがお過ごしでしょうか。

さて、この度修養科第七四九期が九月一日より始まり、笠岡の修養科生、私を含め六名が無事日々を通して頂きましたので、その感動と感謝の思いをお世話になつた各先生や、教友、そして、今後修養科生活を送られる方々にお伝えさせて頂きたいと思い、筆を執らせて頂きました。色々と書き綴る前にまず、私が修養科へ行きたいと願うようになったきっかけからお伝えさせて頂きます。

それは、以前教会の方や、親族の方達の顔にどろを塗る様な道中を通り、同時に積んできたほこりを払いもう一度、天理教を真剣に学びたい、そして、胸を張ってやって行きたいと思つたからであります。私はバカです。バカ息子です。若い頃には暴走族をしたり、やくざの真似事をしたり、教会は暴走族のたまり場の様な時もありました。親に迷惑を掛

けたと思つています。こんなバカを本気で助け、支え続け、信じてくれた信者様を始め、父母兄弟妹達、そして地元待つ本当の友達に恩返しをする為のステップに、まず、修養科が必要だったのです。私には、莫大な借金がありました。借金を払うまでに三年、それから三年は理づみの道中だったと思います。三年前、よし、行こうと胸を張り、会長様に修養科のお許しを願うと、「満きしたら行ける様に勝手になる。仕事を無理に休む事なく、人に迷惑をかけんよう。行こうと思っても行かん所、行きとこのうても行かん所とある。」と聞き、成る程と、納得をしました。やがて親神様からのお許しが出たかの様に、「とても忙しい中行つて、しつかり思つた事をしてきなさい。」と、業者や、関係者の方々から背中を押されるように、修養科へ来させて頂く事が出来ました。

面接の時に、あーこの七四九期に入れて良かったと思ひました。皆、全国から集まった同期だ、仲間なんだと強く感じ、とにかく自分の癖であるケンカ早い、切れるというものを出不さない様に頑張ろうと心に誓い、一ヵ月に突入しました。始めは慣れないせいもあり、疲れが溜まり、不足を多く感じていました。色々な事を同じ組の人に相談すると、「たつたの三ヵ月なのにもう不足ですか、駄

目じゃないですか、皆同じようにつらい思ひしているのに、もっと頑張りましょうよ、つらいからこそ人は皆集まり、皆と打ちとけたんじゃないんですか。」と、言われたからびつくりしました。そう言ってくれたその人は、天理教の事はほとんど知らないまま修養科へつれて来られたと言っていました。生まれてから天理教の子として育つた私には大きな一言でした。そうだったと感じ、すぐに心と言ひ聞かせ、切り替える事が出来ました。それからというものの、色々な事が変わりました。私が不足を抱いていた人の言葉が違つて来たのです。そして、行動さえもがらりと変わり、こちらが戸惑う位に感じました。「あつ、これが心通りかな。」と実感し、親神様にお礼を申し上げました。それまでにあつた偏頭痛も消え、修練も休む事なく通ることが出来ました。

修養科に来て、出会つた人は沢山います。その中でも、取り分け、接する機会が多い詰所の同室の人にも、色々と支えて貰いました。私が具合が悪いと思えば、すぐにおさづけの取次をして下さり、色々な事に対応し、話を聞いて貰いました。共に悩み、共に成人し、一緒に修了証書を頂くのと、肩をたたき合いました。お手ふり等、覚える事が頭に入らず、自信を無くしかけては励まし合い、一生忘れ得ぬ友であると感じました。やがて、一ヵ月

が過ぎ、二ヵ月目を迎える頃には、詰所内だけでなく、色んなクラスの人達とも打ちとける事が出来ました。対人恐怖症のなごりが人との間に壁を作っていました。どうしてもそんな自分を変えなかつた。正直、話す事さえ辛いと思う事もあったので、打ちとける事が出来た時は、とても嬉しかったです。時には、友達同志のいざこざや、身上・事情に、一緒になつて悩み、励まし合える様になつて来て、いつしか対人恐怖症を克服できた様に思いました。皆それぞれにプライドを捨て、我欲を払拭し、ひのきしんや、朝夕のおつとめを頑張っています。そんな仲間に出会えたからこそ、こちらにも励まされ、頑張れた様な気がします。

もうすぐ三ヵ月を終え、皆とも離れると思うと、とても辛い。まだまだ一緒に学び、一緒に頑張りたい。通ってみると、本当に短い三ヵ月だったと思います。やがて地方に飛び立つて行ったら、ここで感じた事、学んだ色んな事は忘れたくないです。むしろ、糧にして修了証を頂いてからの人生を歩んで行きたい。ここを出たら、八つのほこりを日々納消しつつ、工事現場で、にをいをかけて通りた、今まで話せなかつた教会の人達に、感謝の気持ちで対応したい、今まであまり使っていなかつたおさづけを、多くの人に取次たい、後世にあます事なく伝えたいです。

出来る事、出来ない事、出来る時、出来ない時、色々あると思いますが、我が教会、我が大教会、我が天理教の為、頑張ります。

修養科生活

七四九期 辻井里実

修養科第七四九期としておぢばに帰らせて頂いて二ヵ月が過ぎ、修養科生活も残りわずかになりました。この二ヶ月間は、一日一日をとてても充実して通らせてもらいました。

私は修養科に来て初めて、聴覚障害という身上を持った人たちと接する機会を与えて頂きました。修養科が始まって最初の日、クラスで私と同じ年くらいの女の子と目が合いました。私の中で何か感じるものがあり、彼女と話をしたいと思いました。どう話しかけようかと考えていた所に、手話の先生が来て、彼女と手話で会話を始めました。そこで初めて彼女が聴覚障害者であることを知りましたが、私の思いに変わりはなく、その日のうちに本屋で手話の本を購入し、一人で手話を勉強し始めました。朝の挨拶から覚えて、毎日少しずつ練習して、覚えてたの手話で話しかけるといふ日々が続きました。三、四日した頃、彼女は幼い頃から厳しい訓練を受けていて、口型(口唇の型)で、だいたい相手の言

葉を判断できることを知りました。それから手話を覚えながら、身ぶりも交えて話をするようになりました。

『音が聞こえない』ことは、今まで当たり前のように五体満足で通らせてもらって来た私にとつて、想像以上に大変な事だと思知らされました。すぐ前を歩く彼女を呼び止めるのにも、走って追いかけてはいけなかつたり、普段、使っている言葉をそのまま手話にするのはとても難しく、物事を簡素に話す事にも困る事がありました。

人に想いを伝えることは、言葉を話す事が出来てもなかなか上手く行かないのに、コミュニケーションの要である会話をする事がスムーズに出来ないのはとてももどかしく、大変な事だと思いました。今では、根気強く私の質問に答えてくれる彼女のお陰で、だいぶ思いを伝え合えるようになり、何事もすぐに諦めないことが肝心だと、身を以て経験することが出来ました。聴覚障害を持った人たちが接する中で、改めて自分が健聴である事、五体満足である事の有り難さを毎日実感しています。

修養科では、自分の周りで見せて頂くことがたくさんありますが、少しでもまるく、大きくなれるように、残りの修養科生活を喜んで通らせて頂きたいと思ひます。

本部青年会総会

本部青年会総会は一年に一度、真柱様が我々青年会員に対して、我々の歩むべき道筋、方向性をご教示下さる日であります。ここに総会当日のお言葉を抜粋して掲載させていただきます。



第79回青年会総会、中庭を埋めた会員たち

要旨

『青年会では、年祭活動の具体的なスローガンとして別席者の増加ということ掲げている。全ての会員が、これを自分の目標、励みにしようと、心を

そろえることが第一歩だということを忘れないようにしてほしい。

そもそも別席は、教理も何も知らない人に教えの概要を紹介する場ではない。親神様の御守護をありがたいと感じ、親心に感謝し、さらに一層深く教えの理を心に治めて、ご恩報じにためさせていたいただきたいという心で聞かせていただく語である。

一人の人にをいが掛かり、別席を運ぶまでに丹精するのは、簡単なことではない。それには、皆さんの真実が大切だと思う。別席を運んでもらうだけが目的ではなく、おさづけの理を拝戴して、おたすけをさせていただけるようになってもらうことが本来の目的だということを忘れないようにしなければならぬ。

いまは教祖百二十年祭への三年千日を仕切った活動の最中だということ。非常時と耳にすることで分かるように、普段ではない時である。

この三年を、青年会のあらきとすりよの意気、そして真実の心をもって目標である別席者の増加ということに集中して当たっていただきたい。その歩みを素直に一歩踏み出せば、おのずと道は開けてくると信ずる。』

ひのきしん隊の宿舎、百母屋でこの原稿をまとめている最中、家内からメールが届きました。「孝祐(六才の息子)が、人は死んだらどうなるのか心配で泣きながら寝付いた。どう答えたらよいか」と。私は「出直しの教えを小さい頃から聞いていたので死についてあまり考えたことはなかった。人は死んだら、また赤ちゃんになつて生まれ替わると伝えて。」と返信しました。

教祖は、魂は生き通しており、死をもって一切のものが無に帰すのではなく、生死を繰り返して成人を遂げたあかつきには、病まず、弱らず、死なない珍しい不思議なご守護をお約束されています。「出直す」とは文字通りやり直すことであり、今世、来世、来々世と何度もやり直して少しづつ成人の歩を進めて、親神様の思召通りの人間へと近づく道程であります。

教祖百二十年祭を迎えるこの時旬に、真柱様は我々青年会員に対して、成人の歩みをより力強くする手段を明確にお示し下さいました。それは別席者の増加であり、一人の人に おたすけをさせていただけるようになってもらう努力を通して、我々の心の成人をご期待下されておられるに違いありません。会員の皆さん、別席者の増加を成人の手立てとして歩んでいこうではありませんか!!

(青年会笠岡分会委員長 佐藤 真孝)

第三十一回 全教野球大会

笠岡フールトラザース初戦敗退

去る十月二十八日(火)晴天の御守護の下、予選を勝ち抜いた代表(一一五チームが登録)、全三十九チームが一堂、親里球場に会し開会式を皮切りに、今年で三十一回目を迎える全教野球大会が盛大に開催された。



対南和戦、喜び溢れ打席に立つナイン達

神聖なる開会式

7:30 Am

開会式の席上、参加チームを代表し、我が笠岡ブラザーズが選手宣誓の大役に預かり、チームキャプテンのK氏に、その白羽の矢が譲り廻った。無論、整列した各チームの遙か先頭に立つ羽目になる事は言うに及ばず、風貌たるや、瘦躯中背、丹念に洗濯し直され、黒、白の球衣に身を包み、神聖背番号10のゼッケンが朝日に輝く。満面紅潮を惜しみなく露呈し、決意漲る口元はしつきとへの字に結

ばれ、天高く突き刺すかの如きに伸びきった右手は、興奮と感激の念に噎せ、ビブラートを帯びる。注目の時が流れ、超ド級のうねり上がった『宣誓』の音が満を持して放たれた瞬間、一斉にフラッシュを焚く光に我を奪われた氏の絶頂を回想するに、いと容易い舞台ではあつた。この千載一遇を機に、選手生命を捧げ、果敢に挑んだ氏の気概と、名台詞に、満場割れんばかりの拍手、喝采が怒濤の如く鳴り響き、「名・迷門?、笠岡ブラザーズ、此処に有り」と、一躍全国区にその名を知らしめたのであつた。再結成以来、苦節六年、我がチーム球史を飾るに余りある一シーンである。その後、一行は安堵の間も無く、第一試合が行われる白川仮設球場Dグラウンドへと直行する事になる。

白川Dグラウンド

8:30 Am

二年ぶり、三回目の出場を果たした我がチームは、秋季キャンプを張ることなく、無謀にも夢望とも取れる初戦突破を掲げ、激戦区奈良大会を制した南和分教会チームと対戦した。両チーム、握手を交わし、ジャンケン。先攻を取り、先ずは、さい先の良いスタートを、誰もが切る筈だつた。ところが、相手ピッチャーの立ち上がりも殊の外、冴え、敢え無く斬り返された。

ピンチはその裏、とりつく島も与えず訪れ

た。終始、我がエースピッチャーの超速球は打たれ得ぬまま、立ち上がりノーヒットで、俊足揃いのランナーに二点を献上、更に、ダブルプレーを焦ったベテランらしからぬプレーも続出し、計四点を与える結果となつた。

ピンチの後は、必ずしもピンチのままでないのが野球の妙。二回表、クリーンアップの攻撃で早くもチャンスを迎える。フォアボール、中前ヒットで無死、一、二塁。監督を兼ねたT氏が一塁ランナーに出て、一転、ムードは押せ押せ。此処で当然ベンチを見るが、監督は塁上。其処には、多忙の中、時間を割き「一声」とばかり、声援に駆け参じ下された大教会長様をはじめ、詰所主任先生、教養主任先生、助員先生、現役療養中T氏の、笠岡きつての超豪華ゲストの方々に加え、女子四名の方の花を添えての応援を頂く。当然一同脱帽の上、小拝。この小機を見逃さなかつた相手バッテリー、ソツ無く牽制球、二塁タッチアウト。見事な連携を見せ、チャンスの芽を積



大教会長様もご声援下されたが・・・

み取ったかに思えたが、二死後、再び中前安打、満塁とし、一打、同点本塁打の機運高まる。

此の絶好機に、ヒーロー誕生の甘い香りを漂わせながら、指定席に向かったU氏。相手ピッチャーのカーブに酔い、我に酔い、打球は強烈な衝撃音を残しながらも堅守に阻まれ、惜しくも点に結び付ける事が出来なかつた。

その後、二点一点と得点されるも、回を追う毎に、制球が定まり、安定感抜群、本来の右腕本格派投手の片鱗を見せつけた期待のルーキーM氏、バッテリー間の呼吸も俄に増して、やや難のあるマウンド裁きさえ覚えれば逸材になる事間違いないの活躍であった。

その後、チャンスも幾度か訪れ得点圏内ランナーを出すも、あと一つ繋がらなかつた。その中、圧巻であったのは、我がチーム監督。自ら二安打の活躍を見せ、果敢に俊足重体を揺るがし、二塁を攻め落としたかに思えたが、好返球が二塁手の下に送られ、タッチアウト。血気盛んな頃を今にして思い出させるハッスルプレーではあつた。予定された時間が差し迫り、零対七の時間切れコールドの結果に終わったが、安打に関しては、相手チームを上回り、点数に見る程の大差ではなかつたかの様ではある。ただ、痛切せねばならぬ事は、「練習」一字に尽きる事は言うまでもない。また今回、平日の真つ直中にありベストメ

ンバーで挑む事が出来なかつた事は因であるが、その縁として初参加を遂げたヤング層の広がり、又、今回も野球を通して新たにふぶくを目指す人もでき、あらかとよりよぶが誕生する場に於いて、その名が示す通りワールドブラザーズの名を輝くものになっている。このチーム指針に一助の手をお差し延べされた、親神様、教祖に改めて感謝致し、大教会長様をはじめ、諸先生方の厚きご支援、ご協力を賜りました事、この場をおかりして、御礼申し上げます。

誠にありがとうございます。また、来年に向け、活動を今まで以上に活発に進め、青年会層の交流の場としてお使い頂けるべく努力をさせて頂き、その輪を広げさせて頂きたいと存じます。

その一つとして、大教会長様のお許しを頂き、来年、ソフトボール大会を開催させて頂く事になりました。詳細は、本誌にて後日掲載させて頂きますので、何卒宜しくご協力を賜りますようお願い申し上げます。

(W・B広報担当 中村 義太郎)



試合を終え、更なる躍進を誓うナイン

総括
 にをいがけ・おたすけ実修会を終えて
元一日に返り、布教の渴を
巻き起こそう!

にをいがけ・おたすけ実修会、要員百三十名が任命されて、三月、四月におかきさげ、おさづけの取り次ぎ方、布教実修と研修会を重ね、五月から九月迄、部内教会へと出向いて、にをいがけ・おたすけ実修会をさせて頂きました。

この実修会は、大教会長様が教祖百二十年祭へ向けて一番大切な事として、にをいがけ・おたすけを強く推進したいとの思いから始められました。今はたすけの旬、たすかる旬とお教え頂きます。先達の方々が一生懸命運ばれ、つくされたお陰で、現在の道の栄えがある事を思えば、人を救って我身たすかるとお教え頂く事の実践しかないのではと思わして頂きます。おさづけを取り次ぎ、目の前で見せて頂く御守護に喜び、勇み、感激を体験させて下さる旬、今やらねば本当の信仰を培う事は出来ないと思えます。

来年、再来年と、年二回実修会を各教会で実施する事をお打ち出し頂いておりますが、実修会だけに終わる事なく、毎日の積み重ねこそが、旬に込めさせて頂く私達の使命ではないでしょうか。

大教会長様の強い思いを戴いて、“布教の渦を巻き起こそう！”を合言葉に、教祖百二十年祭へと、つとめ切らせて頂くようではありませんか。

(布教部員 岡崎 和夫)

―西境内地拡張整備ひのきしん― 直属ひのきしん五日隊

笠岡大教会では、十一月一日より五日迄、直属ひのきしん五日隊の第一次として、三名が伏せ込ませて頂きました。これは、教祖百二十年祭へ向けて打ち出されました西境内地拡張整備ふしんに「ちばへの伏せ込みは、たすけの理づくり」と、お教え頂く上から、六月二十五日の事始めより連日多くの教友が土持ちひのきしんに励んでこられました。更に八月初旬からは、五日隊も編成されました。

第一次隊の参加者の



第一次五日隊、喜び溢れる参加者たち 於：普請現場

内訳は、直一七名、直二五名、福山五名、高屋七名、島根五名、上下・府中市四名でした。第一日は結隊式、マイクロー、ワゴン車に分乗して神殿に参拝、お願いづとめの後、本部より下付された真新しいおやさとのきしんの旗を先頭に、勇躍ふしん現場に向かい、九時より二時間、昼休憩を挟んで一時三十分より二時間適宜休憩を取りながら、片道二百メートルの道のりをモッコを担う人、一輪車を押す人、布製の小袋を持つ人、各々体調に合わせ十一月の初旬にしてはかなり日射しも強く、足腰の不自由な方にとっては少々きついかなと思われましたが、親神様からのかりものの身体に感謝し、一荷の土でも運ばせて頂きたいとの思いか、皆満面に笑みを浮かべ喜びの汗を流させて頂きました。夕づとめ後の修練は、各班で大教会の実践項目についてねりあいをもちました。

二日目は、昨日と打って変わって曇り空の下でしたが、絶好のひのきしん日和で、勇んでつとめさせて頂き、修練は、世話班、佐藤氏の教話がありました。三日目に入り、大教会長様も御参加下さり、小雨の降る中も、皆一層勇み心につとめさせて頂きましたが、午後からは雨足も激しくなり、休養としました。少し疲れも出てきていた矢先の雨で、文字通り恵みの雨だったのでは。夜は各班代表三名による感話を聞き終了。四日目は、昨日の休

養で英気を養ったお陰で、元気いっぱいつとめさせて頂き、夜は大教会の親心で会食をさせて頂き、一同、時旬の働きについて大いに語り合いました。最終日は、午前の作業終了後、神殿に参拝、お礼づとめ。詰所にて解隊式後解散しました。

五日間を振り返りました時に、期間中、事故、過ちもなく終えさせて頂き、又、皆さん方が一手一つに、ちばへの伏せ込みに心から喜び勇んでつとめられました姿に接して、今さらながらちばの理の尊さ、御存命の教祖の温かい親心を強く感じさせて頂き、本当にありがたく、嬉しく思わせて頂きました。又、ある先輩の会長さんが、身上ながらも懸命に頑張っておられる姿に思わず「あまり無理をしないで下さい」と申しますと、『いや、これくらい頑張らずにはおれん』と申されました。その目は『日頃の身上かりものの御恩報じと、かすけの理づくりです』と申しておられるように、私には感じられました。

今回参加されました方全員が、年祭活動への勇み心を秘めて国々所々へお帰り下さったと確信致しております。尚、今後の笠岡大教会の五日隊の予定は、第六次隊(立教百六十八年)まであります。第二次隊は、来年(立教百六十七年)一月二十六日より始まりです。御参加をお待ちしております。

(布教部長 佐藤 道孝)

談話室



尊い御用を頂いて

稲倉分教会前会長夫人 北川 美子

一昨年の暮、大教会長様より、憩の家事情部へつとめさせて頂く様に、とのお言葉を頂き、私は一瞬目の前が真白になりました。而も期限が一応五年間という長い期間であり、それ以来、ことある毎に、人間思案が頭の中を駆け巡りました。先輩である廣町分教会の前奥様にお伺いしますと、病棟のおたすけだけでなく、月一回の割合いで夕勤後のお話(十五分)、お昼の全館放送(十五分)、宿直等、色々なお仕事をさせて頂くことを伺い、ますます案じ心が強くなったのです。早速神様より御仕込み頂きました。腰痛と耳鳴り、病院へ行き、治療して頂くのですが、益々痛くなり、夜は耳鳴りで眠れず、本当に困りました。大教会長様よりおちばでの尊い理の御用を頂き乍ら、あれこれにと人間思案を重ねる自分の未熟さを心からお詫びし、お受けする御返事を申し上げた次第です。

昨年三月二十五日、部長先生との面接も、腰は未だ完全ではなかったのですが、存命の教祖にお縋りして一生懸命つとめさせて頂こうと心に誓いました。早いもので、昨年四月一日より勤務以来、一年八カ月の月日が経ち、腰の身上もすっかり御守護頂きました。二代真柱様の憩の家創設理念をお聞かせ頂く度に、この憩の家の姿を、今迄は外からしか分からなかったのですが、今改めて感動の日々を過させて頂いております。二代真柱様は「利用者には可能な限りの満足感を与えて頂くことが出来たら、私としてこの上ない喜びであり、又、憩の家の理想へと着々と歩を進めている事になる」と、仰せられています。又、私達一人一人の歩み方を「これ以上出来ないと言える親切をもって」、「可能な限りの満足感を与えて」と、強くお示し下され、憩の家の理想を要望されています。毎朝、部長先生の前で、「一同、今日も一日親神様、教祖様にお喜び頂ける様つとめさせて頂きます。」と、お誓ひし、笑顔と親切を実践させて頂く様、心がけております。

未信の方が大半をしめる入院の方々の中には、おさづけに不信感を抱き、ことわられる事もしばしばです。「陰乍らお祈りさせて頂きます」と、明るく引き下がるのですが、手術が近付き、病状が進みますと、不安になられ、『先生、おさづけって何ですか』と、質

問され、教祖のお話、おさづけの素晴らしさを、体験を通して話させて頂き、お取り次ぎさせて頂く時、御存命の教祖のお働きを感じ、思はず涙がこぼれます。抗癌剤投与で苦しい中を、明日への希望をつないで治療されている方々に、どんな事でも小さな喜びを共に探して見付けるお手伝いをさせて頂くのが、私共のつとめと思はして頂き、わけても旬の真只中、初心にかえって頑張らして頂くとう心に誓う今日此頃でございます。

約 束

福南分教会長 掛谷 和由

私は今笠岡詰所で教養掛助員として勤めさせて頂いております。修養科七四九期生、三ヶ月目の助員です。男子二名女子四名の修養科生と共に、楽しく過ごさせて頂いております。もうこれで忘れ物はない。自分で支度して出てきたのに、靴を忘れていた。詰所主任の吉岡先生に、近くに靴屋はないかお尋ねすると「ある、ある。ジャスコが直ぐそこにある。何でも売っている。行って見られい。」と教えて下さった。教えられた通り、助員専用の自転車に乗り、門を出て右に曲がり、五分程行くとジャスコに着いた。大きな店である。靴も売っていた。少々気に入らなかつたけど、せっかく来たのだからと思い直して、靴とツ

ツカケを買って店を出た。自転車の前かごに靴とツカケの入ったビニール袋を入れて走り出した。ところが急に用が足しなくなってきたのである。五分とは言え、とても詰所まで持ちそうにない。人間の我慢にも限度がある。何処か良い場所はないかと、きよきよるしながら走っていると、いい場所があった。川の堤防の一部分だろう。名も知らぬ雑草が背丈程の高さに伸びて、思い／＼の実をつけ、秋風にゆらり揺れている。其処に程良いへこみがあり、誰に気兼ねする事なく用を足す事が出来た。後は詰所に帰るだけである。自転車のサドルが高く足が地に届かないのが少々気になるが、これ位の事なら我慢出来る。それにしても詰所の周りも随分変わったものである。新しい住宅が所狭しと建ち並んでいる。あまりの変わり様に感心しながら走っていると「あれ？笠岡詰所がない。」大きな笠岡詰所が見えないのです。笠岡のハッピを着て、笠岡詰所を尋ねる訳もいかず、ただひたすらに走るだけであった。走っているうちに大きな道に出た。国道二十五号線です。我が青春時代、自転車一人で走った覚えのある思い出の道。詰所出発から、帰所まで二時間あまりかかってしまった。

「親の信仰している天理教の神様は本当にあるのでしょうか。あるなら私にその姿を見せて下さい。三年のうちに必ず自転車一人で

でやって来ますから・・・」。そんな約束をしたのは、中学三年夏の子供団参の時の事でした。それから四年三ヶ月後の、昭和三十三年十月はじめ、私はこの道を通って南礼拝場の丸柱の影に、泥まみれ汗まみれの姿で座っていました。「今やって来ました。約束の時は過ぎてしまいました。」と、拜をしていると、誰かが私をしつかり抱きしめて下さいました。『よう帰って来たなあ。』声が聞こえた。親神様を知らず、教祖を知らなかった私ですが、私はその時「いつか、きつと、本当の天理教の布教師になります。」と、約束しました。今、未だ果たされていない約束。教祖百二十年祭。いや、いつか、きつとですよ。



実践項目集計 (9月)

百万軒にむかひかけ	112,452	軒回件所
おきつけのお取次	4,303	
身上事情お頼み	826	
提出教会	117	

こころの詩
▽今回の課題は「自」、撰六十三句中、笠岡に繋がる教友の方三名、三句が見事撰ばれ掲載されましたので、ここに転載させて頂きます。おめでとうございます。

準秀詠 川島郷分教会前会長 香取敏子
自信持ち

佳 詠 東悠分教会長夫人 田林美智子
自由の守護鮮やかに

佳 詠 芳井分教会長夫人 佐藤 香苗
自由の守護身に染む
病床の中

養徳社発行
『陽気』誌十一号、「道柳」より転載。

前回到引き続き、和歌をご紹介致します。
いかずちの

はざまの蟬の初鳴きに
梅雨あけるらし 夫と瓜はむ

あの人に 又あの家に
よるこびを

伝えて行かん 真夏日の午後
東悠分教会 田林美智子

更なる読者の皆様方の才能溢るる作品のご寄稿を、お待ちしております。

秋季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます親神天理王の御前に会長上原理一慎んで申し上げます

親神様には「月日にわにんけんはじめかけたのわよふきゆさんがみたいゆへから」との思召のままに泥海中より道具を引き寄せ守護を教え八千八度の生れ更わりを経て人間

とこの世をお創造になりお育て下されたばかりでなく子数の年限の到来と共に教祖を社としてこの世の表にお現れになり万いさいを明かしひながたを示してこれのたすけ一條の道をおつけ下さいました 加えてをびや許しを道明けとして身上・事情を通して

次々と人をお引き寄せになりお仕込み下さり陽気ぐらしへの足取りを確実なものにして下さいました事は誠に有難く勿体ない極みでございます 私共はお引き寄せ頂いた喜びと御用にお使い頂ける誇りを胸に日々は御恩報じを念じつつとめとさづけを通して

たすけ一條の上にお勤め励まして頂いております その中にもこの月二十六日は親神様が教祖を月日の社とお定めになり世界助けに踏み

出された芽出度い日に当たりおぢばでは秋の大祭が執り行われますがこれの大教会でも今日の吉日に理のお許しを戴いて只今からおつとめ奉仕者一同参集う理に繋がる道の子供達のお歌の唱和と共に明るく陽気に勇んで座りづとめてをどりをつとめて秋の大祭

を執り行わせて頂きます 皆の真実の状を御覧下さいまして親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて本日は本部世話人島村廣義先生が参拝にお越し下さっておりますので後程教祖百二十年祭に向かう成人の時句に当たっておぢばの声をお聞かせ頂きます お聞かせ頂く一つ一つをしつかり心に治め実動させて頂くべく成人の糧とさせて頂く所存でございます

又私共は教祖百二十年祭に向け「をやの思いをにいがけ内^{うちうち} 治に心を配りおたすけに誠の心を尽くそう」を合言葉に三つの実践項目を定めてつとめさせて頂いております

がおぢばでは年祭に向け西境内地拡張整備ふしんやおやさつとやかた南右二棟のふしんにも取り掛かって下さりましておられますのでそれに真実を伏せ込ませて頂くのはもちろんひながたの万分の一なりとも通らせず「自ら苦勞を求めて御恩報じの道を歩む」心を定めて年祭に向かつてつとめ切る覚悟でございます

何卒親神様には旬々に当たつての皆の誠真実の心定めをお受け取り下さいますして方たすけの上にも更なる自由の御守護をお現し下さいますして教祖百二十年祭には共に喜び合う楽しみづくめの道の姿をお見せ下さいますようお願い申し上げます



秋も深まり、紅葉のシーズンが到来しました。天理の銀杏並木も、今年も又、秋空に黄金色の傘を並べ、歩道には、その落ち葉で華麗な絨毯を敷きつめてくれる時期となり、そして暑くも寒くもなく、ひのきしんには、絶好の季節となりました。

教祖百二十年祭に向けての西境内地拡張整備ひのきしんも、連日七百名近い参加者で、予定より七ヵ月早いピッチで、二〇%強完了している様です。現場では、夫婦、親子、老若男女が相合し、日頃の感謝の念を込め、喜び勇んで、ひのきしんに励む真実の伏せ込みに、生気が漲っています。親神様、教祖もお喜び頂いているものと存じます。笠岡隊も十一月始めには、五日隊ひのきしん隊を派遣する等、

日を追う毎に参加者も増加し、工事のピッチも更にお上がっている様です。一部情報では、来年夏迄には終了するやの話もあります。落ちこくしては終了してしまいます。

十一月三十日(日)には笠岡大教会伏せ込みひのきしんが実施されます。この際万障繰り合わせて、共に真実の伏せ込みに参加させて頂きましょ。

むりにどつせといはんてな

そこはめいくのむねしだい